

Princess Rouge

悪徳栄える歓楽街の路地裏。

単調に唸り、生ぬるい風を吐き出す室外機と酒瓶を詰めた箱の間に蹲っているのは年端もいかない少年。ろくに食べてないのか、ひどく痩せている。薄汚れたジャンパーとスラックスを羽織っているが、明らかにサイズが合わずぶかぶかだ。

貧相な四肢をジャンパーの中で泳がせ、再び膝を抱え直す。

「あー……だりいー……」

努めて空腹を意識しないようにするが、それも限界に近い。懐からくしゃくしゃに潰れた煙草の箱を取り出し、乾いた唇に一本咥える。

震える手でライターを持ち上げ、穂先を炙り一服。

煙で腹は膨れないが少しはごまかせる。

とことんツイてない人生だが、ジャンパーのポケットに突っこまれた煙草を持ち逃げできたのはラッキーだ。

何日まともな食ってないんだっけ？

カートを押して徘徊する他のホームレスにならつてダストボックスをあさるのはまだ抵抗があるが、それも時間の問題。

恥に常識にプライド、さらには尊厳とか、空想上のくだら

ない概念に拘泥してたら野垂れ死ぬだけ。

新入りの少年は、浮浪者のたまり場と化した路地裏でも浮いていた。

家庭の事情でやむにやまらず家出てきたティーンエイジャーは珍しくもないが、まずそのいでたちからして変わっている。

大人サイズのジャンパーとスラックスを身に付け、袖と裾を二重に折り返しているが、靴は履かず寒空に裸足だ。しかもよく見れば、服のあちこちに乾いた血痕が付着している。

トラブルを抱えていると勘のいい者ならずとも一目で気付く風体が作用してか、彼は周囲から距離をおかっていた。ドラム缶の火にあたる浮浪者の中には時折チラチラと盗み見る者もあるが、大半は我関せず無視をきめこんでいる。どのみち場末に流れ着いたのだから、だれしも人に言えない問題を抱えている。いちいち他人の事情に首を突っ込んでいたらおまんまの食い上げ。

少年にとっては都合がいい。

他人の干渉はうざいだけ。

ごくまれにその服はどうしたとか、怪我をしているのか尋ねてくるお節介だか物好きだがいたが、俯いたきり無視し

ていれば皆肩を疎めて去っていった。

だが靴がないのはいただけない。裸足裏はすでに傷だらけ、泥だらけだ。あたり一面に尖った瓶のかけらや石ころ、ゴミなどが散乱し、最悪切り傷から破傷風に感染する。医者にかかるあてもカネもない少年は確実に詰む。

仕方がなかった。

あの時は急いでたのだ。

この服の持ち主から奪うことも一瞬考えたが、サイズの合わない男物の靴など躓きのもとになるだけだ。

転んだら追い付かれる、そして殺される。

あの男が生き返って追いかけてくるんじゃないか、血の海に横たわったあの人が恨みがましく這いずってくるんじゃないか、そんな強迫観念や被害妄想に近い焦燥感が止まらず、裸足で衝動的に家を飛び出した。

とにかく一刻も早く、一秒でも早くあそこから逃げたかった。

ほぼ部屋に閉じ込められた育った少年は、母がたまに買ってくるお飾りのシューズ以外自分の靴など持たなかった。

母のプレゼントはどれも装飾こそ凝っていたが、実用にはとことん向かない。あるいは纏足を施す気だったのか……自分を捨てた男の二の舞を防ぐために？

今となつてはわからない。

あの人が考えていたこともその真実も、永久に。

伸び放題の前髪が不揃いに視界を遮る。風呂に入っていないから匂うはずだが、もう鼻が麻痺してしまった。

これからどうしたらいいか、どこへいけばいいのか……わからない、何も。

思考を働かせるのがひどく億劫だ。

無気力に膝を抱え、ボンヤリと虚空を見据える。

首の後ろが寒々しく違和感を覚える。何年かぶりに髪を切つてうなじを露出した。あの人は髪を切るのを許しちやくれなかった。

でも、もういない。

今の彼を女の子と間違える人間はだれもない。

「……だりー……」

もう一度、口に出して呟いてみる。

こんな言葉遣いがバレたら折檻されていたが、その本人がもういないとくればどんな汚いスラングも吐き放題だ。

「私」は……いや、「俺」は自由だ。「僕」より「俺」がいい、ちよつとだけ強くなった気がする。

それが虚勢でも、今ここにいることを肯定してもらえろ。

「『俺』……ね」

むずがゆい一人称が早く馴染むのを願い、口の中でくり返す。

フアーストネームは封印する。

彼には英語名と中国名があるが、どちらも女の名前だ。あの人が理想の娘にお仕着せた名前など金輪際名乗りたくない。あの人はもういないのだから、義理を通す理由もないわけだ。

……あの人がいないのに、なんで俺はここにいるんだ？

空きつ腹に煙がしみる。

ふと路地に影がさす。

店の裏口からまろびでた人物が、「くそつたれ！」と怒鳴り、何かをおもいつきり壁に投げ付ける。

弧を描いて跳ね返った何かが、少年の足元に転々とやってくる。高級感あふれる新品の口紅だ。

店の裏口から飛び出したのは彼と同年代かやや上の少年で、いかにも夜遊びを好むハイティーン風のレザージャケットとジーンズで身を固めている。

「あのアバズレ……ひとのプレゼント台無しにしゃがって何がこんだせえのいらないだよ、高かったんだぞ」

ブツブツ呟き、ゴツイブーツでやたらめつたら壁を蹴り付ける。彼女と喧嘩でもしたのだろうか、殺気立った様子に怯えて周囲のホームレスが散っていく。

劉はただ呟いネオンに眼を眇めて、壁に当たり散らす少年を眺めていた。

「なに見てんだよ、フラれたのがそんなにおかしいか」
尖った眼光で睨まれ、咄嗟に逃げ遅れる。

憤然たる大股でやってきた少年が正面に立ち塞がり、ブーツの厚底で劉の顔の横を蹴り付ける。脳の奥でかすかな既視感が蠢く。

「……………別に。関係ない」

逃げろ、さもないと面倒なことになるぞ。そう理性が警告するが、体は座り込んだまま動かない。単純に燃料切れだ。腹が減りすぎて力が出ない。

劉は自暴自棄に限りなく近い気分でわざと見せ付けるよう

に煙草をふかす。

少年の顔が憎々しげに引き曇り、無造作に襟首を掴み上げる。

「家なし？ ウリでもしてんの」

首が締まって苦しい。無意識に片手を重ね、手をもぎはなそうとする。劉は最初の爆発でさっさと立ち去らなかつた選択を後悔し始めていた。

場数を踏んだホームレスなら働いて当然の勘が、彼にはまだ備わっていなかつたのだ。酸欠の苦痛に顔が歪み、少年の手に弱々しく縋り付く。

「はッ……痛ッぐ……はな、せ」

「今気が立ってんだ、お前がサンドバックになるか？ あのオンナ……男に真がせるのが趣味のポールダンサー……ちやほやされていい気になりやがって」

少年が低く呪詛を紡ぎ、ねばっこい目で劉を品定めする。少し酔っ払ってみたいで呂律が怪しい。

怒り狂った少年の言い分を整理すると、こうだ。

彼はこのクラブの常連で同じ店のポールダンサーに惚れていたが、プレゼントを持って行った楽屋でその彼女が支配人の前に跪きフェラチオしている現場を目撃してしまった。そこで言い争いになり裏口から飛び出してきたというわけだ。

たまたま劉が居合わせたのは不運だった。容赦なく襟首を締め上げられて、壁に押し付けられた劉は、突然仰け反って笑いだす。

「は……はは」

「ンだよ気持ちわりい」

最初は小さく、次第にけたたましく、膨らみ弾ける哄笑の狂気にあてられて少年がちよと引く。

コイツの言ってることやってること、全部お笑いぐさだ。

『私』に理想をおつかぶせて『俺』を否定し続けたあの人とおんなじ、結局は独りよがりの思い込みじゃねえか。

酸欠の苦しみに生理的な涙が滲み、視界を彩るネオンがぼんやり滲みだす。喘鳴と笑いの下から途切れ途切れの言葉を発し、真つ向喧嘩を売る。

「勝手に夢見て、勝手に幻滅してちや世話ねーな」

「……ッ……」

少年が怯む気配が伝わる。多かれ少なかれ自覚はあつたのか……浮浪児と侮っていた劉の、異様な気迫に吞まれたのか。

殴られるかな……痛てえのはやだな。痛くしねえでくれるかな。漠然とそう思い、諦念に回歸して目を閉じる。粘着質な視線が顔じゅう這い回り、体にそって下りていくのを感じる。

「—いくら?」

「……は?」

「お前の値段。いくらだ」

うつすらと目を開け、不審げなまなざしで少年を凝視。売
春を持ちかけられてると気付いたのは、数呼吸あとだ。(以
下続)